

スポーツ人口を増やすために高体連としてできること
— 児童・生徒とその保護者に対する意識調査から —

群馬県立沼田高等学校
濱 田 豪

はじめに

特に成長期の子ども達にとってスポーツ活動は、様々な効果が期待できる大変有意義な活動です。しかし、すべての子どもが生活に取り入れているわけではありません。運動をする者とならない者の二極化が進んでいるとも言われます。その理由はなぜなのでしょう。人々が必要性を感じていないのか、スポーツ活動に問題があるのか、社会の仕組みに問題があるのか。そんな疑問に少しでもせまり、より多くの子ども達がスポーツ活動に取り組みたくましい大人へと成長してほしいと考え、この研究に取り組みました。我々スポーツ活動に携わる者が、現状の問題点を共有し、少しでも改善し、その上で各世代の指導者が連携して環境を整え、スポーツ活動の良さを子ども達や保護者の皆さんにPRしていくべきだと考えています。膨大な資料が得られた中、一部しか紹介できないので詳細は群馬県高体連のHPからご覧いただきたいと思います。

1 アンケート調査の概要

① 目的

「高校でスポーツ活動に取り組むかどうかは子どもの頃の運動経験が影響する」と考えられる。「小学生がスポーツ活動に参加するかどうかは保護者の考え方が大きく影響する」という仮説のもと、児童・生徒並びにその保護者の意識の現状を把握し、スポーツ環境の課題や問題点を明らかにする。

そして結果を広く公表し、小・中学生、保護者に向けて運動部活動の良さをアピールしたり、本県スポーツ関係者に現状を周知して、今後のスポーツ活動の活性化、スポーツ環境の充実につなげる基礎資料とする。

② 対象者

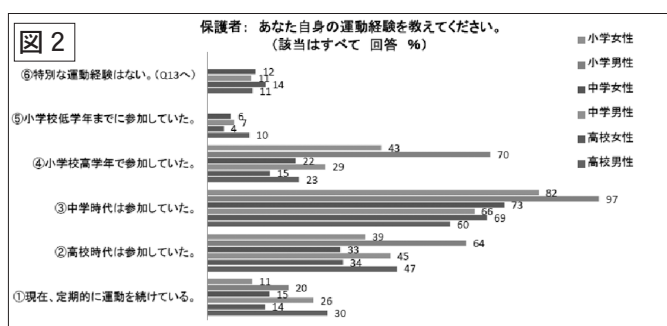
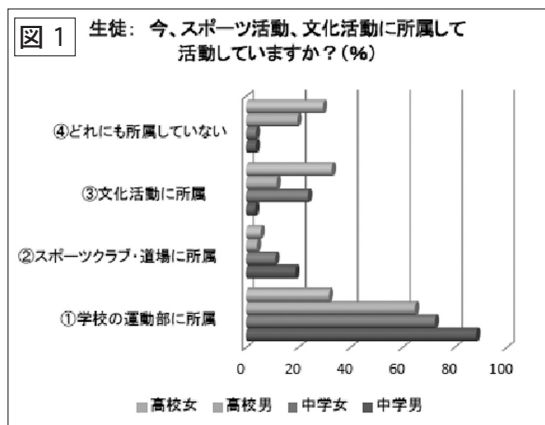
県中体連、県小体研に協力をいただき、小学校3～5年生、中学1年～3年、高校1年～3年を全県から各学年男女別に300人程度を抽出して、その保護者（男女問わず1名）にも回答を依頼した。

③ 方法

小学生は、保護者と一緒に質問紙に○をつける方法で実施し、保護者には記述の回答もお願いした。中学・高校生とその保護者には、マークシートと質問紙に○をつける方法を併用し、具体的な意見を記述してもらった。

2 アンケート調査から見えた「スポーツ活動の現状」

- スポーツ活動への参加率は、親の世代と現在の中学・高校生を比較すると、現在の方がスポーツ活動への参加率は高い。
- どちらの年代も、男女ともに、スポーツ活動を一番行っているのは中学時代であり、今も昔も中学校の運動部活動が、スポーツの普及に大きく貢献しており、高校スポーツの土台になっていることが分かる。



- 幼少期から徐々にスポーツ活動を始め、中学時代に参加率がピークになるが、高校時代からは減少し、大人になって参加している者は5人に1人以下に減っている。(図1, 2)

これらの結果から次のような疑問が湧くが、今回の調査結果からいくつかヒントを見いだすことができた。

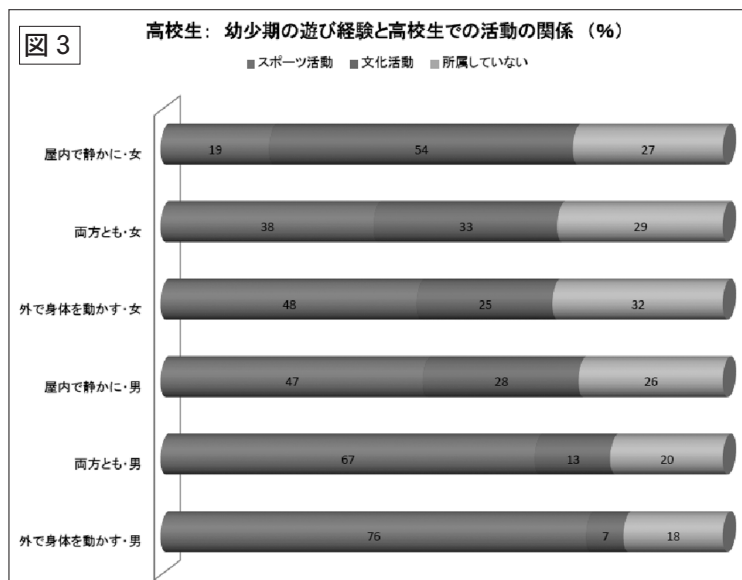
- 小学生は運動することが好きなのになぜスポーツ活動始める者が少ないのか？
→きっかけ？、受け皿？、親の方針・負担？
- 高校生のスポーツ活動への参加率が中学生に比べて低いのはなぜか？
→大学受験の影響？、勝利至上主義の弊害？、他の選択肢の増加？(アルバイト、文化部、塾通い)
- 大人になるとなぜスポーツを続けないのか？ →環境がない？、興味関心？、時間に余裕がない？
- 女子はなぜスポーツから離れていくのか？ →他の選択肢？、スポーツの魅力？、女子の特徴？

これらの傾向は、他の調査でも示されており、本県に限ったことではない。現状を変えることはできないのだろうか？

ここで、今回のアンケート調査を行うにあたって立てた仮説について調査結果から検証したい。

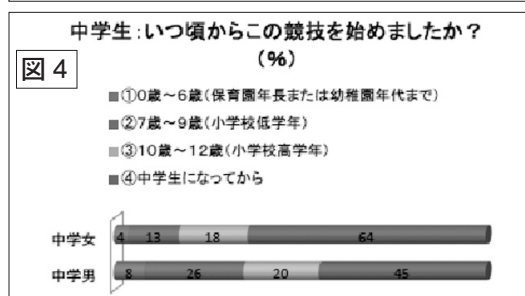
仮説：①「高校でスポーツ活動に取り組むかどうかは子どもの頃の運動経験が影響する」

②「小学生がスポーツ活動に参加するかどうかは保護者の考え方が大きく影響する」

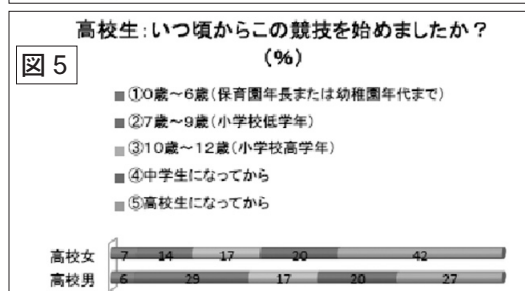


- 「幼少期の遊び経験と高校生での活動の関係」を見ると、屋内で静かに遊んでいた女子は文化部に所属する割合が高く、男女とも外で遊んでいた者は運動部に入る割合が高い。この結果から幼少期の遊び経験との関連はあることが考えられる。(図3)

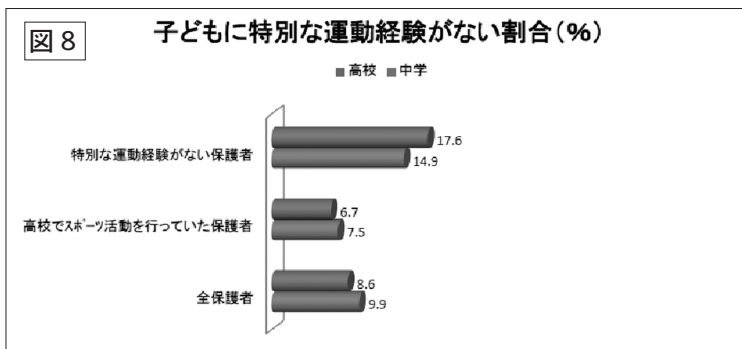
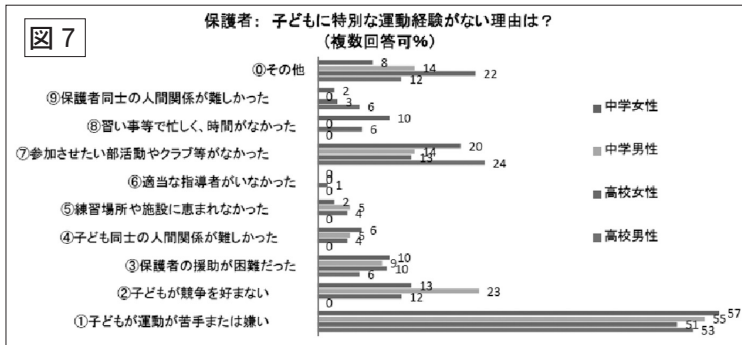
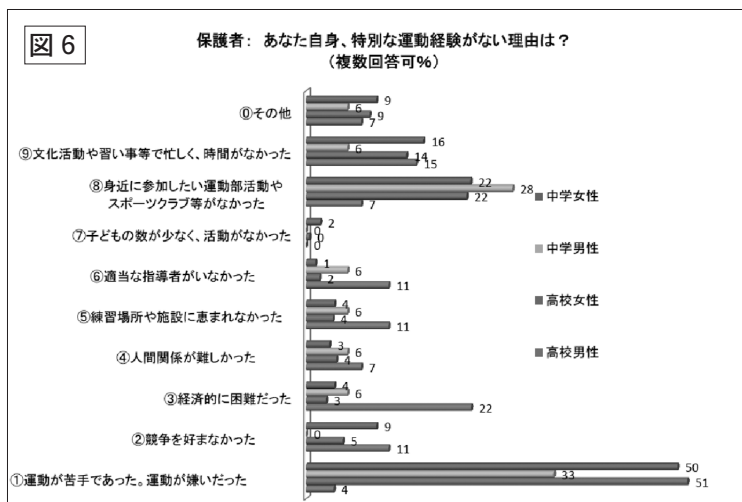
他の結果と併せて考えても、スポーツ好きになってさえいれば、中学校入学を契機に部活動でスポーツ活動を始められる場合も多いことが分かる。また、女子は中学に入って始める者が多く、男子に比べ小学生のスポーツ活動への参加者が少ないことがうかがえる。



る。(図4、図5)



- 小学生から中学・高校と通じてスポーツ活動を行っていない者もいることから、その理由を保護者に聞いてみると、「子どもが運動が苦手または嫌い」が半数以上であり、やらない理由が環境や保護者の意向ではなく本人の嗜好であることが分かった。幼少期に苦手意識を持ち運動嫌いになると、その後もスポーツ活動を行わない可能性が高いことが分かる。保護者の運動経験がない理由を見ても同様な傾向があることから、「運動が苦手または嫌い」と思わせないことが小学生までの親や指導者に必要と考えられる。また、少数ではあるが人間関係や保護者の援助を理由にスポーツ活動を行わなかったことも分



かった。(図6、7)

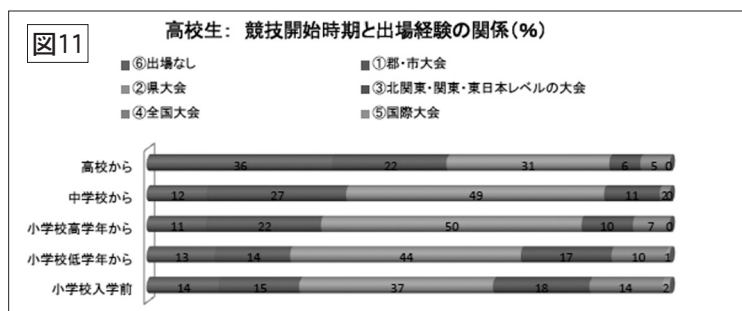
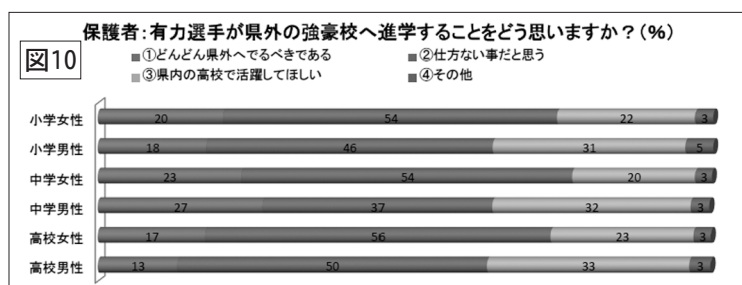
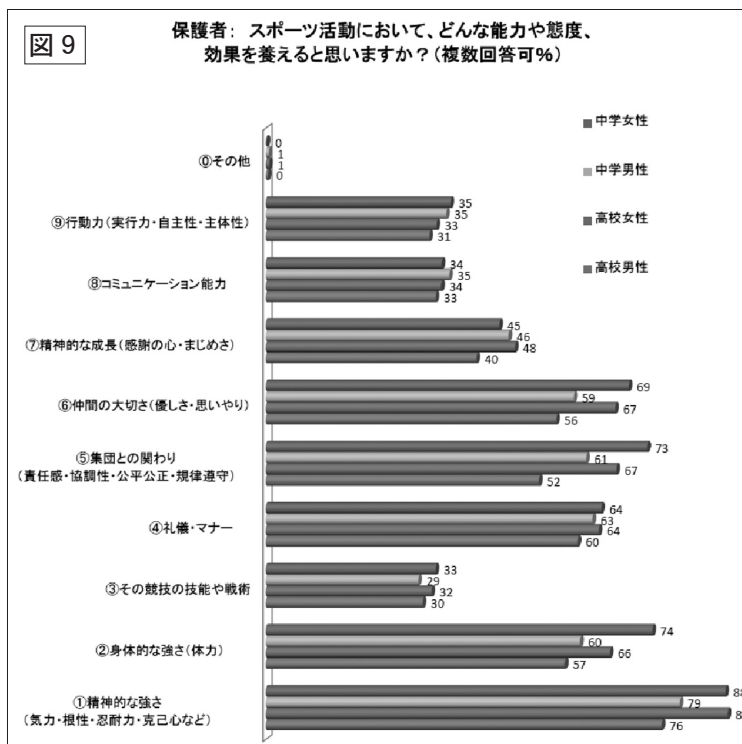
○ 親の運動経験と子どもの運動経験の相関を見たところ、「高校でスポーツ活動を行っていた保護者」の子どもは特別な運動経験がない割合が低く、「特別な運動経験がない保護者」の子どもは、特別な運動経験がない割合が比較的高い傾向が中学・高校生の両方で見られた。このことから、スポーツ活動を経験した保護者の子どもは何らかのスポーツ活動を行う可能性が高いことが推測される。(図8)

○ させたいと思っていて参加させていない保護者に理由を聞いたところ、「保護者の負担・保護者同士の人間関係」「運動が苦手または嫌い」「参加させたい活動がない」などの回答が多く、「家族の時間がとれない」「経済的な援助が困難」などの回答も見られた。また、小学校3年では男女とも「まだ早い」との回答が4%あった。このことから、スポーツ活動の参加には保護者の考えが影響する可能性は高く、保護者の考えを変えることで参加率を高める可能性があることが示唆された。(図は省略)

◎本人の興味・関心(好き+得意)+保護者の意向(価値観↑-負担↓)+環境=参加者↑

3 アンケート調査から見たスポーツに対する保護者・児童・生徒の「意識・価値観」

- スポーツをすることが好きな割合は学年が進むにつれて若干下がっている。保護者も、年齢構成が上がる高校保護者で低い傾向があり、スポーツ活動を行う意欲は年齢とともに下がる傾向が推測される。
- 好きな理由は、やはり「楽しい」であり、どの年代でも一致している。保護者でも理由の1位である。児童・生徒は、「勝ったり上手になるとうれしい」がこれに続く。保護者では、「気持ちがいい」「体力がつく」が「楽しい」に続いて多く、子どもと大人のスポーツの魅力や価値はやや異なることが分かる。子どもの方が「勝つこと」「うまくなること」への欲求が高いことがうかがえる。(図は省略)
- 「楽しい」「気持ちいい」がスポーツ活動を続ける原動力と考えられるので、指導者は、その欲求を満たしつつ上達を促し、「勝ったり上手になるとうれしい」を経験させ、さらなる向上心に繋げることが大切である。日常の「楽しい」「気持ちいい」活動が、勝利を目指す前提条件であることが分かる。
- スポーツ活動で養える能力や態度、効果については、保護者は「精神的な強さ」を上げる割合が高く、



生徒は「身体的な強さ」を答える割合が高い。（図9）

○ ほとんどの保護者がスポーツ活動の価値を認めており、子どもに「させてよかった」「今後させたい」と思っている。スポーツ活動に大きな期待を寄せている様子がうかがえた。（図は省略）

○ 「させてよかった」理由は、「精神的な成長」「体力向上・健康増進」と答える保護者が8割であり、「技術の習得」を上回っている。スポーツ活動を経験した中学・高校生生の保護者のほとんどが「参加させてよかった」と思っていることを小学生の保護者に積極的に伝えたい。（図は省略）

○ 有力選手が県外の強豪校へ進学することも6割から7割程度の保護者が「どんどん出るべき」「仕方ないこと」と肯定的にとらえており、「県内の高校で活躍して欲しい」を上回っていることから、競技スポーツへの期待が大きいことが分かる。（図10）

○ 競技力と競技を始める時期の関係を見たところ、早く競技を始めた方が上位大会に勝ち進む経験を得ることが分かった。競技力をつけるためには幼いうちに始め、多くの経験を積むことが有利であり、中学・高校から始めた競技で上位大会へ勝ち進むのは難しいことが分かる。各種目の競技力向上と小学生年代の普及には有効

なデータと考えられるが、昔に比べ専門以外の運動能力が低いという指摘もあり、幅広い運動経験を求める意見も多い。また、専門種目をやりすぎることによる「スポーツ障害」や「燃え尽き」も子どものスポーツ活動を指導する上では大きな課題である。（図11）

○ 「自由記述」では、現状の問題点を指摘する声や慎重な意見も見られた。スポーツ活動への期待は大きい、「勝つこと」を目指すことで活動がゆがんで本末転倒である。生活や他の活動とのバランスをとり、無理なく続けられる活動をプロデュースし、部員達の将来に多くのプラスを与える力が部活動の指導者には求められる。目先の勝利だけを目指したのでは、もし勝てたとしてもプラスは少ない。より多くのプラスを求めるためには、勝利を願う保護者に対して部活動の方針や目的を明確に説明し理解を得る必要がある。

4 調査結果から見た「本県スポーツ界の課題」 （※高校・大人世代については省略）

小学校低学年：・親の負担（遠征や付き添い・経済的）・まだ早い・苦手意識・人間関係への不安（親）

小学校高学年：・親の負担（遠征や付き添い・経済的）・やりたい種目がない・苦手意識

・人間関係への不安（親・子）・徐々に運動嫌い（特に女子）・楽で楽しい遊び

中学校：・顧問の負担・他の活動との両立・親の負担（遠征や経済的）・やりたい種目がない

・人間関係への不安（先輩・先生）・（一部）やりすぎ・燃え尽き・勝利第一

・初心者への配慮・外部コーチとの連携・学校の限界（生徒数減）・指導者の専門性

5 結論・提言「群馬県が目指すべき理想像」 （※高校・大人世代についてはここでは省略）

『全員がスポーツを楽しみ、競技者は国内トップレベルへ、そして次世代へ』

スポーツ活動は様々なプラスを生む。→ だからこそマイナス面を出さない配慮が必要

→ 体力・精神力だけでなく人間力・社会人基礎力といわれる力も得ることができる。

競技力の向上には、「①基本的運動能力」と「②経験＝専門性の獲得」が必要



※子どものうちに運動好き・得意な子に育て、永く続けさせたい。

親・学校体育・遊びが「楽しい経験」をさせる

1 幼少期には外遊び。運動遊び。→運動好きへ

そのためには、楽しい経験をさせる「仲間」と「大人」が必要

全員に！



地域社会の協力

2 小学生には、学校体育と競技を始めるきっかけ→運動好きへ

勧誘→させてみて楽しさを味わわせる→ほめる・認める→できる喜び

途中でやめたくない活動＝もう少しやりたい位の活動を



親の負担に配慮

競技力×

参加者増を！



苦手意識×

3 中学生には、部活動と学校外活動、続ける魅力、全般的な運動能力の向上

生徒数減で多種目の受け皿は無理。他校や地域の活動と連携。初心者への配慮が必要。

既存の部活動は適性・興味に合わない場合もあるが、スポーツへの関心と体力UPを目標に

次に繋がるスポーツ活動に！

特に女子には運動の機会を → 人間関係を整える

「やっている子を失望させない活動＝勝つこと」ではない 楽しさ・やりがいを！

顧問は、専門種目でなくてもOK。共通の基本（安全や人間関係）を重視して指導し、

親・生徒と部活動の意義や学校の方針、限界等を共有する。（顧問の負担に配慮）

勝利以外（取り組む姿勢や上達、フェアプレー、生活習慣、両立など）を

「認めて讃える大人」、「将来の活躍に期待を持たせる大人」（親・指導者）が必要。

6 今後の具体的な取り組みについて

26年度は理想像に近づけるため、具体的に実施できることを始める。→ 情報発信・連携強化

○ ポスター・パンフレットの作成配布 … A3版のパンフレット作成。

高校生にポスター作成を依頼し、これを小学校、スポーツ少年団、クラブ等で勧誘に使ってもらう。

○ 小・中学校の関係者と普及を考える場を … 「高体連が何言ってんだ」といわれないように「高体連は協力します」というスタンスで接する。→小・中学校の大変さを保護者に話す場面も作れるのでは？

○ 高校生を小・中学校の現場へ派遣し交流を深める … 楽しさを与え→あこがれの存在になり→中学・高校での継続に繋げる。高校生も「教えること」で大きなプラスがあり、将来、指導者を目指す者も！

- 放課後の小・中学校や学童保育等に指導者を配置 … 退職した指導者ややりたくても指導できていない大人を活用する。
- 始めたい時＝情報を欲しい時にすぐにとれる場を … 身近なスポーツ情報を発信する場が必要
- 高校生で出会うマイナー種目のPR … 未経験者でも始めやすい。
施設のある学校でしかできない種目もある。
※色々な運動をゴールデンエイジ前に体験させ、「楽しさ」と「運動能力の開発」→高校で多種目に分散し活躍を！

7 まとめ・今後の課題

県中体連、県小体研の協力を得られた結果、膨大な資料が得られた。すべての資料を群馬県高等学校体育連盟HPにPDFファイルでアップするので、ぜひ多くの方にカラー画面で見いただきたい。

(<http://gunma-koutairen.com/>) 今後、違った視点での分析が可能である。結果を中体連、小体研にフィードバックするだけでなく、広く還元しなければ今回の調査の意味はない。広くスポーツに関わる人々に知ってもらい、連携を深めていきたい。小学生やその保護者に知ってもらうのが最大の課題である。インパクトのあるメッセージを工夫し届けたい。

調査を通じて、改めてスポーツ活動に対する期待の大きさを自覚した。また、中学・高校時代にスポーツ活動ができるのは「幸せなこと」だと実感した。様々な事情で参加できない生徒もいるし、アルバイトを優先する者もいる。文化的な活動も有意義である。また理想的な活動にするのも大変でマイナス面も考えられるが、より多くの小・中学生に良好なスポーツ活動を体験させたい。

競技である以上勝つことを目指すわけで、「勝負事は勝たないと…」という価値観が大人の社会でも浸透しており、勝者が讃えられ脚光を浴びている。勝者がすごいのは当然だが、敗者もまた讃えられるべきである。勝利は活動の善し悪しを判断するひとつの要素であるが、すべてではない。負けても讃えられるような活動をすべきである。保護者・生徒の理解を得てそんな活動を推奨したい。

「気合い」や「根性」は競技には絶対必要な要素であり、文化活動や受験勉強、仕事でも求められる「意志」「根気」といった「精神的な強さ」を表す言葉で、これに期待する声も多い。競技経験のあとに何が残っているのか？次なる目標に繋がる経験になっているのか？そこにこそ、勝利を目指す意義があると考ええる。

学校における教育内容は「高い体力は必要ないのではないか」という意見もあり、大きく変化している。高校における「体育」は激減し、体力向上には不十分であり、技能の向上もままならない。運動する機会は、体育・部活動以外ではほとんどないのが実態である。高校生の体力低下を身近で感じている我々高体連から子ども達、そして保護者にどんなアプローチができるのか、多方面と連携して具体的に始めていきたい。

日本の学校には施設があって、仲間がいて、多くの部活動があり、放課後すぐにスポーツ活動を楽しむことができる。この利点を生かして多くの生徒が生涯を通じて活動的に生活できる体力の土台を身につけて欲しい。それが次世代のスポーツ活動につながる好循環をつくり、その中から全国や世界で通用する高い競技力を持った選手を育成していきたい。

群馬県高体連研究部としては、①少子化の時代にどんなスポーツ活動ができるのか？②子ども、特に女子の体力向上はどうすべきなのか？③子どもと大人がともにスポーツ活動に参加したくなる社会にするにはどうすべきなのか？こんな課題を持って今後も研究活動に取り組みたい。